

# 東日本支部だより

2013年3月1日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

\* \* \* 定例研究会のお知らせ \* \* \*

## 今後の例会予定

3月以降は下記の日程で例会を予定しています。

第70回 3月16日(土) 卒・修論発表

第71回 4月6日(土) 卒・修論発表

第72回 6月1日(土) 博論発表

※ホームページには、例会内容の概要を掲載しています。併せてご参照ください。

## ○修士論文発表1

3. 日本における朝鮮学校の音楽教育

禹 誠美(東京芸術大学大学院)

4. 秩父市旧荒川村の神明社神楽に関する構造人類学的研究

川崎 瑞穂(国立音楽大学大学院)

5. 能楽の戦前と戦後 —「第三の危機」再考—

橋本 かおる(東京芸術大学大学院)

## ◆東日本支部第70回定例研究会

時 2013年3月16日(土) 午後2時～4時30分

所 大東文化会館 3階K-0302

(東武東上線 東武練馬駅 徒歩3分)

[http://www.daito.ac.jp/file/block\\_49512\\_01.pdf](http://www.daito.ac.jp/file/block_49512_01.pdf)

## ○卒業論文発表1

1. 弘田龍太郎の音楽活動とその教育学的考察

伊原 小百合(東京芸術大学)

2. 撥弦楽器サズのトルコにおける使用例と象徴性

鈴木 麻菜美(国立音楽大学)

司会 井上 貴子(大東文化大学)

## ◆東日本支部第71回定例研究会

時 2013年4月6日(土) 午後2時～4時30分

所 お茶の水女子大学 共通講義棟 2号館101室

(地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅 徒歩7分)

<http://www.ocha.ac.jp/access/index.html>

\*ご来校の際は身分証明書をお持ちの上、正門をご利用下さい。

## ○卒業論文発表2

1. 「林邑楽」概念の規定要件とその歴史的変遷

江口 麗華(東京芸術大学)

## 2. 長唄鳴物のリズム構造

—『望月流改訂長唄囃子手附』の手組研究—

鎌田 紗弓(東京芸術大学)

## ○修士論文発表2

### 3. 鉄道駅における音楽型発車サイン音

—その意味作用の分析的研究—

五十嵐 美香(お茶の水女子大学大学院)

### 4. 現代ヨイクにおける歌唱の場と音楽構造の変化

下崎 久美(東京芸術大学大学院)

### 5. 信時潔の声楽作品研究

—自筆譜・著述からみた創作理念の再考—

仲辻 真帆(東京芸術大学大学院)

司会 前島 美保(京都市立芸術大学)

\* \* \* \* \*

## 定例研究会発表募集 (7月、12月例会)

東日本支部では会員の皆様による活発な研究活動のため定例研究会での研究発表を募集しております。発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、7月6日例会については4月20日必着、12月7日例会については9月20日必着で、東日本支部事務局までお申し込み下さい。

\* \* \* 定例研究会の報告 \* \* \*

## ◆東日本支部第68回定例研究会

時 2012年12月1日(土)1時30分～4時40分

所 東京芸術大学音楽学部 5-109 教室

司会 早稲田 みな子(東京芸術大学)

## ○特別企画

1. 近代中国とクルグズにおける楽器とレパートリーの変容 —実演と報告—

出演者 中国琵琶：劉 丹(東京芸術大学)

中国箏：毛 Y(東京芸術大学)

コムズ：ウメトバエワ・カリマン(東京芸術大学)

(発表要旨・劉 丹)

中国琵琶にめぐる大きな変容を遂げたのは1949年に中華人民共和国が誕生し、琵琶を一専攻として音楽専門教育機関に取り入れた以降のことである。

西洋音楽に範をとって設立されたそれらの専門教育機関において民族楽器を習う学生に西洋音楽の専攻生と一緒にソルフェージュ、和声学などの授業を取らせた。十二平均律を用いた難易度の高い曲を演奏でき、明るい音色を持つ西洋の楽器に近づけようとして、琵琶に対して三つの改良が行われた。第一に、十二平均律の半音を出そうとして「品位」というフレットに対する改良を行った。これまでの4相10品の琵琶を現在の6相25品にし、3オクターブ以上の音域を持つものに発展した。第二に、テープで指に貼り付けるセルロイド製のつけ爪を1956年に考案された。第三に、生糸で作られた弦の代わりに金属弦を使用するようになったことである。発表では、伝統

曲「十面埋伏」、「春江花月夜」と1960年代に創作された「春雨」という三曲を演奏し、実演に通じて楽器の改造に伴う演奏技法やレパートリーの変容についても説明した。

(発表要旨・毛 Y)

中国の古箏は2500年以上の歴史をもっており、中国楽器を代表する一つである。故にその名称は、あくまでも「悠久の歴史をもつ箏」という意味である。今日標準として一般的に使われている古箏は21本の絃からなりたっている。その素材は、真中が鋼線であり、その上に銅線を巻き、更にその上にシルクを巻き、最後にはナイロンの線を巻いたとても精巧な絃である。演奏する際、左右の手の親・人指し・中・薬指の共計八本に、タイマイの鱗甲を素材とする爪を、布製のテーピングを巻き付けて演奏する。

そして今回の実演による研究発表では、古典曲である《崖山哀》と創作曲である《箏篋伝説》の二曲を通して、古箏の調弦・奏法・楽譜等を説明した。数字譜を用いる古典曲の演奏では、今回あえて主に民国時代に流行した純スチール絃を使い、余韻が長いという特徴的な音色を聴かせた。また五線譜を用いる創作曲では、混合調性音列の調弦や打樂器的な奏法等、今日の古箏演奏における音楽的表現を聴かせた。

(発表要旨・ウメバエワ・カリマン)

今回の発表はクルグズの国民的三弦楽器であるコムズを中心とした。コムズとその音楽実践史は三つの時期に分けることができる。すなわち、ソ連成立以前、ソ連時代(1920-91年)、そして1991年から現在までである。本発表では、ソ連時代から現在までのコムズを取り上げ、コム

ズの演奏を通し、楽器の特徴、演奏技法、レパートリーの紹介をした。

コムズの形状は、かつてクルグズ人は遊牧生活をしてきたため、小さく持ち運び易いものであったが、ソ連時代以降にステージ上で使用する機会が増加していくと伴に現在のサイズへと徐々に変化していった。また口頭伝承であった音楽教育は楽譜が用いられるようになったことで、即興演奏は次第に後退していった。

1950年代に改良(ロシア化)されたコムズが誕生し、オーケストラやアンサンブルでも使用され、レパートリーは西洋クラシック音楽を演奏することになった。現在は改良されたコムズは二つの音楽機関でしか残っておらず、需要もないため、改良されたコムズの姿が消えてしまう可能性が高い。

(傍聴記・尾高 暁子)

本支部会員には、アジア諸国出身の優れた演奏者が少なくない。今回は、支部の依頼をうけた中国とクルグズの演奏者が、近現代の楽器改良や奏法、楽曲の変遷を概観した。

第一、第二報告者の劉氏と毛氏は、それぞれ中国琵琶と中国箏の専門家である。両氏の報告はともに、新中国成立後に伝統器楽が被った変革の大きさを、改めて印象づけた。たとえば、洋楽との融合を前提とした十二平均律の導入。音域の拡張。理想の音量や音色を求めた合成絃の使用。つけ爪の普及と技巧的な奏法への傾斜。音楽学院を中心とする音楽実践の標準化など。こうした現象の萌芽は中華民国期にあるのだが、新中国では、国家の文化政策の下で、組織的な継続事業となった点に本質的な違いがある。われわれも、楽器改良から音楽創作、

演奏にいたる全段階を、時代のイデオロギーを映す“実践の束”として判断、評価すべきだろう。

と言いつつ、筆者は劉氏の報告を聞くまで、“中国伝統音楽界では、洋楽への同調路線から伝統回帰の兆しもありか? ”、と根拠のない予見をもっていた。ところが、伝統琵琶界の一流派をなす王派ですら、つい先年、正当な継承者が受け継ぐ琵琶のフレットを、伝統的な中立音を含む間隔から、十二平均律のそれへと改めたと言うではないか。正直この潔さには脱帽したし、60年にわたる洋楽との親和路線を、この“事件”が象徴していると思わずにはいらなかった。

第三報告者のウメトバエワ氏は、定番曲目の紹介に時間を割いた。全て“作り手”が判明している曲だったので、フロアから“そもそも作曲の観念が存在するのか”と質問があった。ウメトバエワ氏によると、コムズの曲は、旧ソ連邦時代にモスクワから派遣された調査者が初めて録音し、楽譜化したもので、演奏者は調査時に“自分の作品だ”と説明した可能性が高い。さらにフロアの興味を誘ったのは、演奏と直接関係ない様々な動作を伴うことと、物語をもつ曲が多いことである。動作の理由を問われたウメトバエワ氏は、持ち物も限られ娯楽に乏しい遊牧生活のなかで、コムズ奏者が最大限に娯楽性を高めようとしたのだろう、と推測した。かつてコムズ演奏の主流だった即興は、すでに廃れたという。旧ソ連邦時代に“見出された”クルグズ音楽は、他民族との比較の眼差しを受けて、定型化の道歩んだのかも知れない。以上は伝統的なコムズの話だが、音楽学院ではフレット付きの改造楽器も用いるという。ただし一般には全く存在を知られておらず、音楽学院を標準とする中国とは対照的な状況が見てとれた。

以上の通り三氏の報告は、内部者のみ知り得る情報や、

得意の実演を交えて、実にもり沢山だった。もし続編があり得るなら、今回時間の関係で伺えなかった現代曲の変遷についても、年代と作品名をおさえつつ、ぜひお話しただきたいと思う。

\*本傍聴記中の「クルグズ」は、『中央ユーラシアを知る事典』等が採用する現地音表記に従った。

## ○研究発表

### 2. 秩父市旧荒川村の《道引はやし》に関する構造人類学的考察 — 神明社神楽の楽曲分析を中心に —

川崎 瑞徳 (国立音楽大学大学院)

#### (発表要旨)

埼玉県秩父市旧荒川村の白久地域に伝承される「神明社神楽」について私は、2008年以來、今日まで調査を継続している。この芸能に注目するには、口頭伝承と楽曲が豊富であるという理由がある。神明社神楽には計17座の演目があり、それぞれの演目に囃子が2~3曲付されている。囃子は計22曲(屋台囃子を入れると23曲)あり、《思かざき》(《岡崎》)など関東の里神楽に共通する楽曲もある。本発表ではまず、これらの楽曲を分析し、その相互関係を示した。

分析方法としては、旋律概形線を折線グラフで示し、共有されている音型を抽出するという方法を用いた。この方法によって全楽曲を分析した結果、それぞれの曲が音型を共有しあっていることがわかった。また音型の含有量比から、《早ふゑ》《道引はやし》に、これらの曲に共有されている各音型のほとんどが組みこまれているという結果を引き出すことができた。これはあるいは、《早ふゑ》と《道引はやし》が、楽曲全体の母体的な存在であることを示唆しているのかもしれない。

さらに興味深いことに、荒川を挟んで対岸に位置する猪鼻地域の奇祭「甘酒祭り」では、この《道引はやし》のみを演奏する習慣があり、同じく対岸に位置する日向<sup>なた</sup>地域の「日向の獅子舞」でも、祭り当日の「宮参り」において、《啓道笛》という《道引はやし》に類似した楽曲を用いる。実際に両曲を比較分析してみると、音型の共有関係を見出すことができるが、この獅子舞の他の楽曲は(《おかざき》を除いて)神明社神楽とは全く異なるものであるだけに、この特殊性は顕著である。なぜ旧荒川村の各地で、神明社神楽の母体的楽曲たる《道引はやし》が無意識的に共有されているのか。この現象を理解する上で、「荒川」という地理学的コードが重要な意味を帯びてくる。両地域は「川」という地理的制約によって分離されているが、フランスの文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースのいうように、神話的思考は、このような対立に直面したとき、媒介という方法を用いて調停を図る。ならばこれらの地域は、川という地理的対立を調停するために、《道引はやし》を用いているとも考えられるのではないだろうか。実際、各地域間の距離的な隔たりを埋めるように、楽曲の距離は極限まで縮まっている。本発表では結論として、《道引はやし》が、荒川を挟んだ旧荒川村内の諸地域の紐帯を成しているのではないかと仮説を提示した。

(傍聴記・神野 知恵)

川崎さんのご発表は、埼玉県秩父市の白久地域に伝承される「神明社神楽」の囃子を分析した実験的な研究であった。川崎さんは、神楽囃子(全22曲)の笛の旋律を旋律概形線で表した後に任意でこれを細かく区切り、現れる旋律型のパターンに便宜的な名称をつけ、その登場可否を全ての曲目において確認し、数値化する作業を行っ

た。分析の結果、「早ふゑ」「道行はやし」と呼ばれる曲には、他の曲に見られる旋律型のバリエーションの多くが含まれているということを明らかにした。

また、近隣地区の祭り囃子でも同一の「道行はやし」や類似する曲が演奏されていることから、曲や芸能の内容を越えた旋律型の共有によって各地区の関係性が構築されていたのではないかと考察した。会場からは、笛の「唱歌」にもっと注目すべきだという意見が出たのに対し、川崎さんはそれに加えて、自身の笛の稽古の経験から笛を吹くときの「指の運び」と旋律型の関係性についても触れた。

演奏者たちが旋律をどのように理解し、記憶し、後の世代に伝承しているかという当事者間のコミュニケーションにも注目すれば、「旋律型の共有」というテーマがより深まるのではないかと感じた。

## ◆東日本支部第69回定例研究会

時 2013年2月2日(土) 午後1時～3時20分

所 東京芸術大学音楽学部 5-212室

司会 野川 美穂子(東京芸術大学)

## ○研究発表

1. 田辺尚雄の備忘録『音楽見聞録』の紹介

薦田 治子(武蔵野音楽大学)ほか

(発表要旨)

日本音楽研究の基礎を築き、邦楽の演奏家たちにも大きな影響を与えた田辺尚雄(1883-1984)は、『音楽見聞録』と題した個人的な備忘録を52冊(第31集欠、別に総目録2冊)を残している。第1集は田辺が財団法人啓

明会より東洋音楽研究のため研究費を支給され始めた時期である大正9年(1920)に書き始められ、最後の第52集は晩年の昭和52年(1977)3月5日で終わっている。30代から90代までほぼ60年にわたって、田辺が何に興味を持ち、どのような情報を得ていたのかを知るための手掛かりとなり得る貴重な資料といえる。

『音楽見聞録』は、田辺逝去翌年から、雑誌『季刊邦楽』が連載で翻刻を掲載(1985:42号-1990:63号、第4集の途中まで)、また1999年に長男田辺秀雄によって「田辺尚雄・秀雄音楽資料」のひとつとして国立劇場に寄贈され、その翌年同劇場の「田辺尚雄・秀雄音楽資料展」にも出展されるなどすでに紹介が試みられているが、その全体像や具体的な内容については、ほとんど知られていなかった。

報告者は、国立劇場のご理解を得て、2011年度と2012年度にわたり、坂田古典音楽研究所主宰坂田進一氏と、東京芸術大学および武蔵野音楽大学の学生等とともに『音楽見聞録』に収録された約1800余りの項目について、項目名、種目、事項、出典などについてデータベースを作成して調査する機会を与えられた。

調査の結果、『音楽見聞録』は、成立時期と内容から、4つのグループに分けられることが判明した。「見聞の記録」としての性格が強いのは、第1期(1920-1932)の12冊および第2期(1933-1961)の9冊で、ここには、直接の聞き書きや、演奏者、研究者などからの手紙の写しといったものが比較的多く含まれる。種目としては、雅楽の割合が比較的高く、また第2期には琵琶楽が目立つ。三曲、歌舞伎、能楽と民俗音楽に対する興味は両期とも一貫している。第3期(1961-1965)の22冊は、明治末から昭和初期にかけての新聞記事、特に都新聞の放送番組欄の収集

に充てられており、その性格から、三曲、歌舞伎関連の項目が多い。第4期(1965-1977)の9冊は、挨拶状や演奏会のチラシ・プログラムのファイルといった性格を帯び、三曲関係の記事が多い。どの期にも、折々の田辺の活動との関連が指摘できるものがあり、他の田辺関係の資料とともに、田辺の研究・教育・普及啓蒙活動との関係を知る手掛かりになりうることも証明された。

今後は、この調査結果を踏まえて、目的に応じて『音楽見聞録』を利用することが可能になったと思う。

(傍聴記・植村 幸生)

従来そのごく一部が公にされていた、田邊尚雄の備忘録『音楽見聞録』全52冊+目録2冊(国立劇場蔵)の全体像と内容の傾向に関する報告であった。田邊の研究生活の全時期を通じて書き継がれた同資料は、内容・体裁に大きな変遷があるものの、巻頭に目次を配するなどきわめて丁寧な作りで、彼の研究活動を傍らで支える重要なツールであったことがうかがえる(同資料自体の公開が想定されていたのでは?というフロアからの質問も十分うなずける)。また、田邊の著作は出典が不明なことが多く後学を悩ませるが、同資料には情報源が逐一記されている点も大きな特徴である。同資料は田邊の膨大な著作物にとって、いわば母体の役割を果たしたといえそうである。その時々々の田邊の活動との連動がある程度認められ(もともと旧植民地を含むアジア関連のトピックが全体の4%に過ぎないというのは意外だが)、彼の関心と人脈をありありと示す同資料が、田邊尚雄研究はもとより、近代日本音楽の動向の把握にも十分活用され得る資料であることが、本発表を通じて明らかになった。

## 2. 12・13 世紀の興福寺四月八日仏生会の伎楽

鳥谷部 輝彦

(日本学術振興会特別研究員 PD (東京成徳大学))

(発表要旨)

本発表の目的は、伎楽を十二・十三世紀の興福寺仏生会の中に位置付けて、伎楽の様子を理解することである。具体的にはこの法会の執行回・日程・次第、及び伎楽の楽人・仕草について言及した。伎楽の起源は『日本書紀』の説によると、百済人味摩之が呉国で習った楽舞を桜井で教えたことにある。その楽舞を「呉楽」と呼んだが、後世には「伎楽」と表記した。歴史的変遷があるようだが、伎楽は明治二年興福寺仏生会まで奏でられた。なお、現代でも伎楽の上演が行われている。多くの先学が伎楽の面、装束、笛の旋律について研究してきたが、それらの研究の中では活用されなかった史料の中に、大乘院文書の『類聚世要抄』第九卷、『御寺務部』第四、『養和元年記』、『興福寺年中行事』がある。今回はこれらと『教訓抄』巻第四を用いた。嘉承二年(1107)から文暦二年(1235)まで興福寺仏生会の執行回は 47 回を確認し、その中には特例として雨儀の例、金堂以外での執行例もある。日程は先ず、三月下旬に廻請を出し、四月八日には今で言う午前中に東大寺仏生会、午後に興福寺仏生会を執行していた。面・装束は東大寺の品を用い、舞人・楽人は興福寺・東大寺・薬師寺から集まり、「音具」(三ノ鼓「黒筒」か)は薬師寺から借りていた。次第は、(1)諸僧・舞人等の着座及び講読師の登高座、(2)楽前・師子・八部衆・笛吹・舞人・楽人の行道、(3)唄・散花行道、(4)講経と伎楽、(5)八部衆・楽人等及び講読師の退出、(6)長吏による浴像、であった。なお、(4)で金堂では講経があり、それと同時に舞台では伎楽が演じられたのだらうという指摘は、近藤静乃

氏のご指摘による。ここに記して感謝を申し上げる。伎楽の仕草は『類聚世要抄』の「同会次第」に少し書かれており、呉公・金剛・迦楼羅・波羅門は二人舞であり、呉公・金剛・波羅門の舞人は「杖」を持つことなどが確認できる。その一方、現段階の調査では不明な点も残った。例えば、浴像所が南大門に置かれる理由、多くの法会(或いは他寺の仏生会)では唐楽・高麗楽を奏でるのに対し、興福寺・東大寺の仏生会では伎楽を奏でる理由、興福寺仏生会の古代から近代までの変遷、である。これらは今後の課題である。

(傍聴記・近藤 静乃)

配布資料によると、本発表の構成は(一)始めに、(二)十二・十三世紀の執行回数、(三)仏生会の日程と三箇寺の協力、(四)仏生会の次第、(五)伎楽の仕草、(結)。具体的には、(一)で典拠史料、先行研究(林謙三ほか)、伎楽復元の現状が紹介され、(二)嘉承二年(1107)～文暦二年(1235)の事例、(三)東大寺・薬師寺との協力関係(楽人舞人の派遣、装束・音具の借用等)、(四)(五)法会次第における伎楽の位置づけ(曲順、楽人舞人の所作等)が図表を用いて示された。

フロアから、仏生会以外に興福寺で伎楽を演じた機会があったか、仏生会執行の目的は何か、十二大会のうち仏生会にのみ伎楽が行われたのはなぜか、興福寺における仏生会の起源や変遷、次第にある「講経」の内容などの質問が寄せられた。伎楽が演じられたのは4月8日仏生会と7月15日伎楽会のみ、という点以外は不明瞭な応答が多く、興味深いテーマであるだけに雑駁で隔靴搔痒の感が残った。今後さらなる史料の精査と研究の進展を望む。

## 東日本支部委員会からのお知らせ

昨年11月10日に行われた大会時の総会を経て、平成24・25年度の新しい東日本支部委員会が発足いたしました。今期は、以下のメンバーにて、活動を開始いたします。東日本支部事務局の住所は、本部の事務所と同じです。会員の皆様からのご連絡は、支部専用のメールアドレス(tog.higashi@gmail.com)にてお受けしておりますので、どうぞ、ご活用ください。

皆様より忌憚のないご意見を賜りつつ、より有意義な学会活動を進めて参りたいと思っておりますので、どうぞ、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

支部長:野川美穂子

支部担当理事:尾高暁子、茂手木潔子

経理担当:野川美穂子、森田都紀

ホームページ担当:塚原健太

支部だより担当:金光真理子、福田千絵、山下正美

発送担当:中村美奈子

例会担当:

【理事】尾高暁子、野川美穂子、茂手木潔子

【委員】井上貴子、澤田篤子、土田牧子、配川美加、

前島美保、前原恵美、丸山洋司

【参事】大沼覚子、佐藤文香、新堀敏乃、滝口幸子、

田辺沙保里、中野未穂、萩谷沙耶佳、

服部阿裕未、星野和幸、丸山彩

## 会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2013年6月5日(6月下旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

Fax: 03-3832-5152、E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望

\*原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきますことがありますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

## 編集後記

今号より、新しい東日本支部委員会にて支部だよりをお届け致します。支部だよりでは、「会員の声」欄で催し物・出版物などのお知らせも受け付けております。会員の皆様には、ぜひ「会員の声」欄もご活用頂き、情報をお寄せ頂きたく存じます。次号の発行は6月下旬の予定です。

(Y)

\*\*\*\*\*

発行: 一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集: 野川美穂子、尾高暁子、茂手木潔子、

金光真理子、福田千絵、山下正美

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com

\*\*\*\*\*